（様式1）

令和6年度　学力向上指導改善プラン

三田市立広野小学校長　朝倉　美穂

学校教育目標	魂みがく　学びにはげむ　心をつなぐ 広野っ子の育成
推進主体	管理職　校内学力向上委員会

学力に関する前年度の状況・経年の課題等			
学力の状況	全国学力・学習状況調査結果の状況（国語、算数・数学に関する質問調査の結果も含む）	国語	○どの領域、どの観点に関してもほぼ全国平均程度の得点を取れている。 ○漢字を使って書き直したり、正しい送り仮名のものを選んだりする設問の正答率が全国平均より高く、文字に対する知識、技能が身についている。 ○「読むこと」の領域の書かれている内容として適切なものを選ぶ設問の正答率が全国平均を3.8%上回っており、文章の要旨を捉えることができている。 ●「書くこと」の１二では、正答が21.9%（全国26.7%）で、正答となる4つの条件を1つもクリアせずに誤答した人数が全国や県の割合より10%以上多い。
		算数 数学	○「図形」領域では、4問中3問の設問で全国平均を上回っている。特に正三角形の性質を問う設問では、9.8ポイント。高さが等しい三角形の面積に関する設問は10.5ポイントと大きく上回っている。 ○「数と計算」領域では加法乗法混合の計算や分配法則を用いた問題で8.9ポイント上回った。 ◆「変化と関係」領域で全国平均を6.8ポイント下回る。特に比例の関係を用いて値を求める設問は5.5ポイント。百分率を用いて値を求める問題は21ポイントと大幅に全国平均を下回った。 ◆「数と計算」領域ではおおむね全国平均値だが乗除混合の計算や（　）を用いた計算が13.7ポイントと全国平均を下回った。
	定期テスト、単元テストなどによる状況（各教科）		○単元ごとにテストを実施し、未定着の児童には同じ問題や似た問題に取り組ませる等して定着するまで個別指導を行っている。（経年） ●題意を正確に捉えられず、問題文を読み取りきれずに誤答する傾向が見られる。
	授業等からうかがえる状況（各教科）		○ユニバーサルデザイン（焦点化、視覚化、共有化）を取り入れた授業づくりに努めている。（経年） ●進んで話し相手に説明しようとする児童が増えつつある一方で、相手意識や目的意識に応じた適切な表現の具体的な指導法を工夫する必要がある。
慣学力向上に係る学習状況・生活習	全国学力・学習状況調査の質問の状況		○「今、住んでいる地域の行事に参加していますか」では、当てはまる・どちらかといえば当てはまるの合計の割合が、67.6%で全国平均を大きく上回っている。 ●「学校の授業時間以外で１日あたりどれくらい勉強をしていますか」では、平日、休日ともに30分より少ない、全くしないと答えた児童の割合が全国平均よりも高く、家庭学習の習慣がないことが分かる。 ●一日の読書時間が30分以上と答えた児童が約24%に対して。全国平均よりも下回っている。
	学校評価などのアンケート調査による児童・生徒の状況		○校内で実施している国語アンケートの結果から国語への苦手意識を持っている児童の割合が減少傾向にある。 ●学校評価アンケートの結果は、児童、保護者ともに「進んで本を読んでいるか」の項目で前年度よりも10%近く減少している。 ●「子どもは進んで（宿題以外の）家庭学習する習慣が身についている」についての評価は59%と低い。
授業改善	・主体的・対話的で深い学びを目指した授業改善 ・ICT機器を効果的に活用（クラウド環境を活かした授業実施等）		○学校評価アンケートの「ペアトークやグループトークを効果的に活用」を90%の教職員ができたと回答しており、子どもたちに考えを発表したり交流したりする場の設定が積極的におこなえたと考える。 ○学校評価アンケートの「ICTを活用することで、より深い学びができた」を80%の教職員ができたと回答しており、調べ学習はもちろん、プレゼンや意見交流などでもICT機器を効果的に活用できたと考える。
研校内修の研究状況・	校内研究の状況		○児童理解を基本にし、個に焦点を当てながら全体に分かりやすい授業づくりをめざす。（経年） ○授業づくりにおけるポイントを明確化し、授業を見る際の検証軸に据える。
	校内研修の状況		○特別支援教育に係る研修の重要性が高まっている。（経年） ○不登校への対策、人権教育の充実など課題教育に対する見識を深め、対応力の強化を図る。
家庭・連携校種間	家庭・地域等の状況		○学校便りや学年通信を通じて取り組みを発信し、懇談会・学級集会などを通じて、地域とともにある風通しのよい学校を創り、家庭教育の充実を促す。
	小・中における教科連携等の状況		○中学校区教育目標「夢に向かって、たくましく歩み続ける児童生徒の育成」の具現化を図り、9年間の成長を見守る。 ○卒園後のスムーズな入学に向け、みつば認定こども園と1・5学年との交流を定期的に実施する。

4月			2～3月	
学力向上に向けての重点的な目標	成果となる目標 （指標となる数値等）	具体的な行動目標 （成果目標達成のための具体的な手立て等）	年度末評価 （今年度の成果と来年度に向けた課題等）	評価
国語・研究推進 ○対話を通じて、互いの意見を関係づけたり、比較させたりしながら自分の考えを作り出すことができる機会を充実させていく。 ○語彙を豊かにすることをはじめとした国語力の育成を図る。 ○漢字を読み書きする力が確実に身に着けられるよう指導を工夫する。 ○書く力の系統表を作成し、児童に生きて働く言葉の力を獲得させ、活用できるようにする。 ○朝の会のスピーチ、対話の時間、授業中等に自分の考えを筋道を立てて話せる子の育成を目指す。	○全国学力・学習状況調査の平均到達率が全国平均と有意差なし。 ○学校評価アンケートの達成度数値が前年度を上回る。 ○毎朝水曜日に「対話の時間」を設定し、学校全体で取り組む。	○単元計画を児童と共有し、教室に掲示する。単元ごとのつけたい力を意識させ、単元終了後にはその力がついたか分析する。 ○相手、意図、目的に応じて話したり説明したりする力を伸ばす授業づくりに取り組む。また、分かりやすく自分の考えを表現するための手立てを指導する。 ○文章の構成、段落の相互関係を意識した読み取り、文章の要点や用紙を捉える読み取りに取り組む。 ○ペアトーク・グループトーク等を活用しながら、自分の考えを交流する場を増やす。	＜特に成果の見られた領域や設問＞ ○自分の考えが伝わるように表現や書き表し方を工夫する問題は、正答率が高かった。 ＜成果の要因＞ ○日々の対話タイムの取り組みが、表現を工夫する力に活きていると思われる。 ＜特に課題の見られた領域や設問＞ ◆話すこと・聞くこと領域の、目的や意図に応じて話題を決め、伝え合う内容を検討することでは、正答率が低かった。また、集めた材料を分類したり関係付けたりして伝え合う内容を検討するところでも、正答率が低かった。 ＜課題に対する取組の具体＞ ◆授業の中で自分の思いについて根拠を元に話したり書いたり伝え合う活動を取り入れる。 ◆文章の中から大事な言葉を見つけたり、その言葉の意図を感じ取ったりすることに課題があったため、文章から、問われていることに関連した言葉を抜き出す活動を取り入れる。	A
算数 ○新たな思考を生み出せるように、ペアやグループ学習を多用するなど学習環境や学習形態を工夫する。 ○基礎計算能力の向上に努める。	○全国学力・学習状況調査の平均到達率が全国平均と有意差なし。 ○学校評価アンケートの達成度数値が前年度を上回る。	○「つかむ（見通す）」「考える」「深める」「ふり返る」の4ステップの構造化によって、わかりやすい算数の授業をつくる。 ○ノート作りの指導によって、一人ひとりの学びを確実に定着させる。 ○解決計画「かきくけこ」を基に、子どもたちが見通しを持って授業に臨める学習スタイルと楽しい授業づくりを通して、数量や図形についての知識技能の向上を図る。 ○兵庫型学習システム教員による、系統立てた指導を図る。 ○休み時間の個別指導、がんばりタイムでの放課後の補充学習を充実させ、課題のある児童への支援を行う。	＜特に成果の見られた領域や設問＞ ○「数と計算」領域の「乗法の性質について考察する」設問では、正答率が全国平均を3.7%上回った。 ＜成果の要因＞ ○学習タイムでの計算練習など、計算力を高める取り組みが成果として見られている。 ＜特に課題の見られた領域や設問＞ ◆「数と計算」領域の文章を読んで問題場面の数量の関係を捉えて式に表すことに課題が見られた。特に、口を使った立式問題でのつまずきが見られる。 ＜課題に対する取組の具体＞ ◆計算式を解く練習だけでなく、文章を読み、意味を理解して立式するような問題を練習し問題文から条件を整理したり、自分の考えを図や絵に表したりして説明する活動を行う。	B
読書活動 ○朝の読書タイムや、毎月23日に実施している「広野っ子読書の日」を活用し読書活動の推進を図る。 ○読書習慣が身につく指導や環境設備を整える。 ○学校司書による環境整備を図り、読書活動の充実を図る。	○読書時間が全国平均と有意差なし。 ○高学年での本の貸し出し数の増加。 ○「読書通帳」100冊読破児童数の増加。 ○図書室の本を年間100冊以上借りる児童を増やす。	○「朝の読書タイム」を毎週月火木金に設定し、読書の習慣化を図る。また、高学年の図書室利用時間を設定し、低学年だけでなく高学年も図書室へ足を運ぶ機会を増やす。 ○学校司書から児童へ、日々の授業や通信なども活用して、図書室の本紹介や周りの児童がどんな本を読んでいるのかなどの啓発を図ることで図書室や本、読書に興味を持たせるようにする。 ○学級文庫を点検整理して読書環境の充実を図る。 ○日常的に音読の宿題や読書の宿題などを出し家庭でも本を読む習慣を身につけさせる。	＜特に成果の見られた取り組み＞ ○「読書通帳」100冊読破児童数の増加。 ○図書室の本を年間100冊以上借りる児童を増やす。昨年2人→今年度63人 ○読書チャレンジ達成人数（2学期末時点）1年11人/2年11人/3年3人/4～6年0人 ＜成果の要因＞ ○学校司書から児童へ日々の授業や通信なども活用して、図書室の本紹介や啓発を図ることで図書室や本、読書に興味を持たせるようにする。 ＜特に課題の見られた取り組み＞ ◆高学年での本の貸し出し数の増加。 ＜課題に対する取組の具体＞ ◆タブレット端末で「三田市電子図書館」を活用する。	A
生活習慣 ○引き続き、進んであいさつができるように継続して声かけを続け、また、場に応じたあいさつや言葉遣いができるようにすることも併せて目指す。 ○学級の話しやすい雰囲気づくりを大切にするとともに、対面での交流に加え、タブレットを活用した意見交流も推進し、自分の考えを多様な形で表現できるようにする。	○全国学力・学習状況調査の平均到達率が全国平均と有意差なし。 ○学校評価アンケートの達成度数値が前年度を上回る。	○毎月の生活目標を6年生が中心になって設定し、リーダーシップを発揮できるようにする。 ○学級の雰囲気づくりとともに、対話での交流とともにタブレット端末を活用した意見交流を推進し、子どもたちが自分の考えをいろんな形で表現できるようにする。 ○メディアに触れる時間やルールをコントロールできる生活習慣を身につける。 ○中学校と連携し、ネットやスマホ、ゲームなどとの付き合い方を見直す場や機会を設定する。	＜特徴的な成果や課題＞ ○「すすんであいさつをしている」児童は、87%(昨年度比12%↑)と大幅増である。 ○「友達関係に満足している」と答えた児童が全国平均を9%以上上回っている。 ○「放課後の過ごし方」について、「家族と過ごしている」「友達と遊んでいる」と答えた児童が全国平均をどちらも20%程度上回っている。 ◆「将来の夢や目標を持っている」と答えた児童が全国平均を10%以上下回る。 ◆「新聞を読んでいる」児童が0%である。 ◆「普段（月曜日から金曜日）、1日当たりどれくらいの時間、テレビゲーム（コンピュータゲーム、携帯式のゲーム、携帯電話やスマートフォンを使ったゲームも含む）をしますか」の設問では、3時間以上が全国平均を7.2%上回った。 ＜課題に対する取組の具体＞ ◆自己肯定感を高めるために、学級全体の聞く態度を意識させ、良い所見つけを定期的に行うなど、互いの良さに目を向ける活動を増やしていく。 ◆意見や考えを発表することが苦手で、家庭学習や読書習慣の確立が明確になった。今後、共通の具体的な手立てを決めていく。	A
ICT機器を活用した授業改善 ○ICT機器を活用した「個別最適な学び」「協働的な学び」を往還することで、「自らの課題に応じた探求学習」「友だちとの対話を通し学びを深める授業」など、子どもたちの主体を引き出すための授業を工夫する。 ○ユニバーサルデザインを取り入れた授業づくりを継続し、「ことばを使って豊かに表現する子どもたち～筋道を立てて伝える子どもの育成～」を目指す。	○全国学力・学習状況調査の平均到達率が全国平均と有意差なし。 ○学校評価アンケートの達成度数値が前年度を上回る。	○ペアやグループ学習を多用し、互いに自分の言葉で考え方や解き方を交流し合うことができる学習を生み出す。 ○学級の雰囲気づくりや対話での交流などタブレット端末を活用した意見交流を推進し、子どもたちが自分の考えを色々な形で表現できるようにする。 ○一時間の授業の構造化を図り、どの児童も見通しを持ち、分かりやすい授業づくりに努める。 ○全職員が研究授業をする機会を設け、互いに授業を見合い研修に努める。 ○自主研修会を定期的に実施し、普段の授業づくりで悩んでいることなどを皆でシェアし、共に学び合える環境を整える。	＜特徴的な成果や課題＞ ○国語の勉強は大切だと思いますかの設問では、肯定的評価が100%であった。 ○PC・タブレットなどのICT機器を、どの程度使用したかを問う設問では、週3日以上がほぼ全校平均と同じであった。 ○PC・タブレットなどのICT機器を活用すると、画像や動画、音声等を活用することで、学習内容がよく分かる児童は、全国平均より6%上回った。また、友達と考えを共有したり比べたりしやすくなる児童は、全国平均より1.4%上回った。 ◆PC・タブレットなどのICT機器を活用すると、友達と協力しながら学習を進めることができる児童は、全国平均より4%下回った。 ＜課題に対する取組の具体＞ ◆学級の雰囲気づくりや対話での交流などタブレット端末を活用した意見交流を推進し、子どもたちが友達と協力しながら自分の考えを色々な形で表現できるようにする。	A
家庭学習 ○発達段階に応じた望ましい家庭学習や、生活習慣の定着を図る。 ○家庭学習強化週間を実施し、自主的な取り組みを賞賛するとともに、家庭学習への取り組み状況を見える化し家庭との連携を進める。	○保護者アンケートでの「子どもは進んで（宿題以外の）家庭学習する習慣が身についている」肯定的な評価を増やす。 ○学校評価アンケートでの達成率が向上する。	○授業の振り返りで、単元でつけたい力に関する記述をし、自分自身でどんな力を獲得できたかが実感できるようになる。 ○学校・学級通信などで、定期的に家庭に意識づける。 ○自分で課題を設定し、「計画→テスト→分析→練習」といった流れで学習ができる方法を示し、実践できるようにする。 ○自主学習ノートに進んで取り組んだ児童のノートのコピーを掲示し、価値づけし、その良さを学級内で広める。	＜特徴的な成果や課題＞ ○「すすんであいさつをしている」児童は、87%(昨年比12%↑)と大幅増である。 ◆「家庭での生活習慣」について、保護者の肯定的評価は83%(同2%↓)であった。 ◆「子どもは進んで（宿題以外の）家庭学習する習慣が身についている」の保護者肯定的評価は46%(昨年比13%↓)であった。 ＜課題に対する取組の具体＞ ◆通信などで、定期的に家庭に意識づけ、学ぶことが楽しいと思える子どもを増やす。	B
家庭・学校園所連携 ○家庭や地域への積極的な情報発信をさらに進め、より一層の連携を図る。 ○連携・交流活動を通してアイデアを出し合い、授業改善に努めるとともにより効果的な活動を工夫して行う。	○学校園所連携交流会を年3回開催し校長会や「学校園所連携」担当に加え「生徒指導」「人権教育」「特別支援」担当部会を定期的に開催する。	○学校だよりやHP、学年・学級だよりなどを通じて情報を随時発信する。 ○中学校区での学校園所の校内研究会の積極的な参加と意見交流を図る。	＜特徴的な成果や課題＞ ○「地域や社会をよくするために何かしてみたいと思いますか」に6年生87.5%が肯定的であった。 ○長坂中学校での校内授業研究会案内が届くようになり、授業交流が始まった。 ◆「学校は必要な情報をわかりやすく発信している」について、保護者の肯定的評価は93%(昨年比4%↓)であった。 ＜課題に対する取組の具体＞ ◆家庭での生活・学習習慣の確立については、小・中学校で連携して具体策を講じる。	A